

公益財団法人日米医学医療交流財団 アメリカ短期看護研修助成

研修報告書 (2018年度 助成者)

作成日 2018年11月13日

氏名 (フリガナ)	舟橋 津伸 (フナバシ ツノブ)
研修地	アメリカ・オレゴン州ポートランド市
研修期間	2018年10月7日 (日) ~ 10月13日 (土)
所属機関名	成田赤十字病院
身分	看護師

～研修参加の動機～

私は現在、第3次救命救急センターで循環器内科と心臓血管外科の病棟で看護師をしており、看護師歴は12年目になります。

今回の海外研修の参加の動機、主には二つです。

一つ目は、海外の医療の現場、特にアメリカの医療の現場を自分の目で確かめたかったことです。二つ目は、2020年東京オリンピックを控え、これから日本に来られる外国人の増加、外国人患者の搬送数増加、それに伴う英語の必要性を感じ、これを機に英語の勉強のきっかけにもしたいと思い、このアメリカ短期看護研修に参加することを決めました。

普段私達が行っている医療や看護の根拠となるもののほとんどがアメリカ主体となっています。例えば、感染対策はCDC (アメリカ疾病予防センター)、BLS・ACLS、酸素療法はアメリカ呼吸器療法学会などと、その基準の多くがアメリカです。日本とアメリカでは保険制度の違いから、入院費用も入院期間にも大きな差があり、その違いは何なのかという素朴な好奇心、興味がありました。

また、当院の外国人患者の受け入れは月々およそ300件、外国人患者のステルベン対応も年に3～5件あります。日中は国際部のスタッフの支援やタブレット端末での翻訳機能の活用などがありますが、夜間などは看護師が対応することになり、少し下手でも英語が通じると、その患者や友人、家族の反応も少し違います。英語の必要性を痛感する瞬間です。

しかし、毎日英語を使う訳でもないのに、英語の勉強となるとなかなか進められないでいたのが実際のところでした。来る2020年に東京オリンピックが開催されることもあり、成田空港に近い当院としては、今後益々外国人患者の搬送数が増えることが予測されます。英語力をアップさせるきっかけにもしたいと思い、まずは“百聞は一見にしかず”、外国の現場を見に行くのは今しかないと思い立ち、太平洋をはるばる渡ってきました。

～オレゴン州ポートランド市～

ポートランド市内を車で移動中に気づいたのは、日本車がとても多いということでした。トヨタ、ホンダ、スバル、日産、マツダ、日立建機のショベルカーなど。かつて日本がオレゴン州含むアメリカ本土を太平洋戦争時代に風船爆弾で攻撃をしていたとは、今回の研修に参加するまで、恥ずかしながら知りませんでした。それが今では友好関係を気づき、医療を通じてこのような素晴らしい交流ができることをとても幸せに思います。

～看護師数と患者比率の違いに驚き～

2日目に訪れたプロヴィデンス・セントヴィンセント・メディカルセンターは、523床に対して看護職員が約1700人、当院では714床に対して看護職員は約半分です。この差にまず驚かされ、機能別看護を十二分に実践できる理由のひとつと感じました。これなら、体交チーム・点滴チームなどもできるし、アセスメントに十分な時間と労力をかけられ、その分入院期間の短縮が可能である理由にも納得できました。

～マグネットホスピタルと病院機能評価～

マグネットホスピタルとは、患者・医師・看護師を磁石のように引きつけて離さない魅力ある病院と定義され、その具体的な取り組みを病院で実際に目にすることができました。

ICUの休憩室の掲示板には、看護師が日常の看護で気づいたこと、解決すべき問題点などを掲示できる環境を提供し、それらを解決することでより良い看護サービスの提供を目指していることがよくわかりました。また、看護師のモチベーションを高める方法として、職員などが大勢通る廊下に、今月の看護師さんとして3人写真と共に紹介していたりもしていました。看護師1人1人が主体となってより良い病院を作り上げていく姿勢、取組みを具体的にみることができました。

他にも病棟の廊下の掲示板には、転倒転落の発生日や中心静脈カテーテル感染などがいつ発生して、それ以来は何も起きていないということ、通りかかる患者家族、スタッフ誰もが見られる環境づくりをしていました。看護の質や量を具体的に測定し、目に見えるようにするのは難しいが、それらを見えるようにしている取組みを様々見ることができ、とても勉強になりました。

一方の日本では、医療機能評価機構の病院機能評価事業を行っています。マグネットホスピタルのような第三者による評価を行い、“医療の質を評価する指標として「患者満足度」と「職員やりがい度」の測定と活用が重要である”との考えを示し、日本もアメリカ同様に、中心にあるのは当然患者であると同時に、それらを取り巻く中心にいるのは、スタッフ、看護師であるという考えから、職員の意見や活動も大切にしていこう姿勢は日米同じと感じました。

～日本とアメリカの違いを知って感じたことと日本の将来性～

広大な土地と多額の資金、財源を見せられると、日本は遠く及ばない点もあると思いました。しかし、これだけ狭い国土、人口密度の高い限られた環境と資源、高齢化社会の中で日本の看護師1人1人は多くの患者を受持ち、看護し、介護し、アセスメントし、一度に多くの仕事量をこなす、遅くまで努力し、日々知識の更新や業務改善などに取り組み、非常に勤勉で忍耐強いと感じました。単純にアメリカがそうでないという訳でも、また日本のやり方がいいという訳でもない、全く違った環境や文化がそうさせている、自然とそうなったのではないかと思いました。プロヴィデンス・ポートランド・メディカルセンターのICUに遠隔治療に使われるカメラ付きの装置がありましたが、限られた人材の日本には今後益々必要なのではないかと感じました。

現在、日本では働き方改革の取組み、考え方が全職種に向けて発信され、日本全体の労働環境の是正、特に教育機関や医療現場の労働環境の過酷さ、時間外労働の改善が求められています。看護の臨床では、まだまだ改善するには多方面からのアプローチをしないとすぐに変革できない課題ばかりですが、そんな環境下で私達看護師は日々努力している、頑張っていると思いました。

今日、人工知能の発達が著しく、日本の国民皆保険制度で得られる医療分野のビッグデータ、その他現場から今まで収集できなかった様々なデータ解析によって、今まで見えてこなかった視点からの予防医学、業務改善の新たな提案や解決策が見つかるのではないかと期待されています。国立社会保障・人口問題研究所では、2035年には総人口に占める高齢者の割合が33.4%となり、「3人に1人が高齢者」になるという推計も出されており、世界でも類を見ない“超高齢社会”日本は、いずれアメリカや他国にこの分野で逆に情報提供できる側になる時が来るのではないかと想像してしまいました。

～ポータランド大学看護学部 シミュレーションラーニングリソースセンター～

最先端の医療シミュレーション機材を見ることができました。多額の資金を投入されているだけあって、多種多様な機能を持ち合わせており、これまた驚きの連続でした。シミュレーションの人形は、チアノーゼの再現や瞳孔縮瞳、マイクを通じて話すことも、泣くこともできる。さらに壊死した肢も取り付け可能、点滴を入れればバイタルの変動もできる優れもの、地元の俳優さんを使っているような場面を想定したシミュレーションが学べるというのは、学生としてはこれ以上ない学びの環境と感じました。この環境は学生だけでなく、看護師として入職したての新人や中途採用者でも未経験項目などについて指導、学ぶのに十分使えると思いました。

～リーダーシップと看護～

5日間の中で講義を受ける際は、英語の資料を頂いて通訳を交えながらのものでした。このリーダーシップと看護の講義では資料はなく、テーマは私達参加者が日頃抱えている仕事上での問題などを元にして、クリティカルシンキングの観点から解決の糸口を探っていくというディスカッション形式でとても面白く、講義を延長してまでのものでとても有意義な時間でした。

先生（看護師）は健康的な対立が大好きという方で、なかなか日本では和を大切にしようとする思考の力学が働こうとするので、“何かを変えたい”、“新たにやりたい”と考えた時に障壁となることを日頃感じるのもとても新鮮でした。中心にいるのは常に患者でなければならず、最新の知見に基づいた提案、取組などについて議論する時、どうしても対立が起こるが、そこで先生が私だったらこう言う。

「その方法で患者に何かあった時にあなたは責任が取れますか？」

この言葉は私の胸に強く突き刺さった言葉でした。変化を恐れない、どう変化があろうと、中心に患者がいなければならない。この考え方を念頭に入れて、また心新たに日々の看護に従事していきたいと思いました。

日々の業務やルールの根拠があいまいになってはいないか、ということを端的に表現した、挿入話、笑い話もとても印象的でした。

チキンを焼く時には端と端を切るのだと母親から教わった子供が、“何で端と端を切るの？”と母親に聞くと、“おばあちゃんがそうしていたからよ”と。納得のいかない子供がおばあちゃんに聞いた所、“小さなお鍋に入らなかったからよ”と。

日々の業務の中で意外と突き詰めたら、大した理由もなく長年なあなあになっていることって実際にあります。これらを少しずつ、良くして行けるともっとより良い看護サービスの提供につながると思いました。

小規模ではありますが、委員会やチームをまとめるにあたり、リーダーとしてどう引っ張っていくかという、自分自身の課題に大きなヒントも頂きました。

～最後に～

今回の参加者は全国各地から集まった10名と小人数でしたが、コンパクトにまとまって行動して食事したり、ショッピングしたりとても楽しく有意義な時間を共有でき、参加者の皆様ありがとうございました。

このような貴重な機会を与えて下さった関係者の皆様方、病棟は多忙な状況にもかかわらず、快く送り出して下さった看護部長さん、師長さん、病棟スタッフの皆様へ感謝申し上げます。本当にありがとうございました。